

ワークシート

【事実・推認・飛躍・「つまり」を見分ける練習】

このワークの目的

文章や状況を読むとき、私たちはつい、

- 書いてあること
- そこから言えそうなこと
- 言いすぎていること

を混ぜてしまいがちです。

このワークでは、次の四つを分けて考えます。

- ① **事実**.. 本文や状況から、はっきり確認できること
- ② **推認**.. 事実から見て、筋を通して言えそうなこと
- ③ **飛躍**.. 言いすぎ・決めつけになっていること
- ④ **つまり**.. 事実をもとにした、自分なりの理解のまとめ

使い方

各問いについて、次の順に書きましょう。

1. **まず事実だけを書く**
2. **そこから言えそうなことを書く**
3. **言いすぎになりそうなことを書く**
4. **最後に「つまりどういうことだ」とまとめる**

問一

「制度は偶然をどう扱うか」より

本文

しかし制度は、偶然を完全に消し去ることはできない。むしろ制度は、偶然の存在を前提として設計されている。保険は事故が起こることを前提に成り立ち、試験は能力差が存在することを前提に機能する。

① 事実

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういうことだと言えるか

問二

「評価とは何か」より

本文

評価は、複数の人や物を比較可能にし、判断を迅速にする。数値や段階といった共通尺度を用いることで、主観的な印象を一定程度整理できる。評価がなければ、意思決定は混乱し、配分は恣意的になりかねない。

① 事実

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどうということだと言えるか

問三

「責任とは何か」より

本文

このように因果関係が複雑であるならば、「原因を作った者＝責任を負う者」という図式は揺らぐことになる。ある出来事が起きたとき、そこには偶然の要素や構造的な背景が含まれているかもしれない。にもかかわらず、私たちはしばしば特定の個人に責任を集中させる。

① 事実

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどうということだと言えるか

問四

「定義の縁」より

本文

定義は思考の省略でもある。何かを定義するとは、本来ならば毎回検討すべき多様な条件を、一つの枠にまとめ上げることだからだ。その省略があるからこそ、私たちは日常的に判断を下し、議論を進めることができる。だが省略は、同時に見落としを内包する。

① 事実

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういうことだと言えるか

問五

「数字の顔」より

本文

ここで注意すべきなのは、統計が役に立たないということではない。むしろ、統計は傾向を把握し、仮説を立てるうえで極めて有力な道具である。問題は、数字を見た瞬間に思考を終えてしまうことにある。

① 事実

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういうことだとと言えるか

問六

「見えているものの外側」より

本文

判断の誠実さとは、判断を止めることではなく、自分の判断の届く範囲を見誤らないことにある。数字を見るなら、その数字が何を数えていて、何を数えていないのかを考える。言葉を聞いたら、その言葉が何を言っていて、何を言いそびれているのかを考える。

① 事実

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういうことだと言えるか

● ふり返り

「自分がいちばん書きやすかったのは

事実

推認

飛躍

つまり

？ 自分がいちばん迷ったのは

事実

推認

飛躍

つまり

【記入例】

問一

① 事実

制度は偶然をなくせない。

むしろ偶然があることを前提に作られている。

保険は事故、試験は能力差を前提にしている。

② ここから言えそうなこと

制度は、不確かなことを消すのではなく、それが起こることを見込んだうえで成り立っている。

③ 言いすぎになりそうなこと

- ・ 制度は偶然を完全に支配し、思い通りに動かしている。
- ・ 制度は偶然をむしろ積極的に作り出している。
- ・ 制度がある以上、偶然はもはや問題にならない。
- ・ 制度は不公平を広げるために偶然を利用している。
- ・ 制度とは、事故や能力差を固定し、人を縛るだけの仕組みである。

④ つまりどういうことだと言えるか

制度とは、偶然をなくすのではなく、偶然が起こることを前提にしながら、それを扱える形にしている仕組みである。

問二

① 事実

評価は比べることを可能にし、判断を早くする。

共通の尺度で印象を整理できる。

評価がなければ意思決定は混乱しやすい。

② ここから言えそうなこと

評価は、人や物を分かりやすく整理し、決めるための基準として働いている。

③ 言いすぎになりそうなこと

- 評価は完全に客観的で、誰にとっても公平なものである。
- 評価さえあれば、人や物の本当の価値が正確に分かる。
- 評価がある以上、判断の誤りは起こらない。
- 評価のない社会では、人は何も決められなくなる。
- 評価は人を傷つけるだけなので、本来なくすべきである。

④ つまりどういうことだと言えるか

評価とは、比較や判断をしやすくするために、人や物を共通の基準で整理する仕組みである。

問三

① 事実

因果関係が複雑なら、原因を作った者がそのまま責任を負うとは言いにくい。

出来事には偶然や構造的背景が含まれることがある。

それでも人は特定個人に責任を集中させがちである。

② ここから言えそうなこと

実際の出来事は単純な原因だけで起こるとは限らないのに、人は責任を一人に集めやすい。

③ 言いすぎになりそうなこと

- 個人に責任を問うことは、つねに誤りであり意味がない。
- どんな出来事も構造の問題なのだから、誰も責任を負う必要はない。
- 責任を個人に求めるのは、人が怠けているからである。
- 偶然が絡む以上、責任という考え方そのものが成り立たない。
- 人は本来、責任を押しつけるためにしか他者を見ていない。

④ つまりどういうことだと言えるか

出来事には多くの要因が絡むのに、人は分かりやすさのために責任を一人へ集中さ

せやすい、ということである。

問四

① 事実

定義は、たくさんの条件を一つの枠にまとめること。

その省略のおかげで判断や議論ができる。

しかし省略は見落としも含む。

② ここから言えそうなこと

定義は考えやすさを与えるが、その分だけ、見なくなる部分も出てくる。

③ 言いすぎになりそうなこと

- 定義は考え方をゆがめるだけで、使うべきではない。
- 定義を使う人は、本当の複雑さから逃げている。
- 定義がある以上、見落としは必ず避けられないので、正しい判断は不可能である。

• 省略すること自体が不誠実である。

• 定義とは、人を支配するための道具にすぎない。

④ つまりどういうことだと言えるか

定義とは、判断を進めるために複雑さを整理するものだが、その整理のしかた自体が見落としを生むこともある。

問五

① 事実

統計は役に立たないのではない。

傾向把握や仮説づくりには有力である。

問題は数字を見た時点で考えるのをやめることにある。

② ここから言えそうなこと

数字は考えるための材料として有効だが、それだけで結論を出してはいけない。

③ 言いすぎになりそうなこと

- 統計は信用できないので、説明には使うべきでない。
- 数字がある以上、そこから先を考える必要はない。
- 統計は本当の原因を必ず明らかにする。
- 統計を使う人は、ものごとを単純にしか見ていない。
- 数字は人をだますために使われることが多いので、基本的に疑うべきである。

④ つまりどういふことだと言えるか

数字とは、考え始めるための手がかりであって、そこですべてが分かったことにしてはいけないものである。

問六

① 事実

判断の誠実さとは、判断をやめることではない。

自分の判断がどこまで届くかを見誤らないことにある。

数字や言葉が何を示し、何を示していないかを考える必要がある。

② ここから言えそうなこと

誠実な判断とは、何かを決めながらも、自分の根拠が万能ではないと分かっていることだ。

③ 言いすぎになりそうなこと

- 誠実であるためには、どんな判断も下さず、ずっと保留し続けなければなら
ない。
- 判断する以上、人は必ず不誠実になる。
- 数字や言葉は不完全だから、結局どんな判断も信用できない。
- 判断の誠実さとは、すべてを完全に見通してから決めることである。
- 相手の言葉に表れていないことまで、必ず読み取らなければならない。

④ つまりどういうことだとと言えるか

判断の誠実さとは、決めることを避けるのではなく、自分の判断が何を見ていて何をまだ見ていないかを意識したまま決めることである。